

70斗

神自秋季合宿

参考資料

11月25 ~

11月27日

張労働

委員長代行として

2週生入木 悟

半年間 自治会として何等行動せず 内題
 提起する事すら無かつた事について とり
 わけ 数年未だこれ程に斗ってきた事には
 て自治会総体として斗い得た事について
 得た。 「しかし 昨年ボクが自治会の持
 つべき 指摘し止揚し 解散宣言を以て
 った。 斗争への主体は 個人要素を確立し
 の 永続性 と思ふ時 今が有効である。 問題
 委員長として 田代君は 承けていたものだ。
 済面 針に 内題は 彼も 承けていた。 彼
 の 見ると 今年 神自総体の 奮闘 針に 合
 得た。 私に 一つ しか 私に 自己批判の
 語らせ 感 だ。 然るに 熊面も けく
 りわけ 自民党の 極右 傾化 = 日帝の本 揺り 露
 晴心 といふ 事実は 我々 生折 感 げいと云
 へ 突っ走 っている のである。 然るに ずば
 くの 諸君が 感知 して いる 事 事は ありうが
 出して 状態 である。 何 等 為 すべき 事 事 見
 つか 本 知 ぬが 私 には 一つ かの 諸君 ばかり 痛
 け 形 で 存 して いる。 少くとも 昨 年の 斗 争 で
 自ら 確立 しよう として いた 姿勢 を 固断 なく 持 続 せ

せり水子半と要請です。

すべからず思想の傾向に押し込められ、世
世個人体験の範疇へと縮小化されていく
中で「私」以上の様子は危険を注視し
つつ、我々自身の思想のバリエーションを
築き、各種研究会を提案する。
後記の新委員諸君と討論の上、進んで
具体的に勧めたい(思)が、今回の合宿の期間
の中で、より積極的な意見(賛否共に)を寄せ
たいと思う。

今回の合宿に關しては、具体は政治方針
その他は上述の如く出せばいい。しかし、議題
者との討論を始めとして、三日間を自らして
と急いで、つつ腹を割って話さ(欲しい)。
分る状態の中で、一つの村会として各自に
設定し、積極的に発言せよ半と要請します。

委員
新委員メンバー (自治会規約に於て常任委員会
に於て決定)
桂野 真知夫 (I)
玄井 亨 (I)
玄田 順一 (I)
水谷 誠 (I)
(大竹 五郎 (I))

尚、八木(副委員長)、由園、村上(書記長代行)
は以前の通り。委員長は副委員長が代行します。

若干の問題提起

はじめに

討論とか対話について、最近、考えるのだが
……実際、話者の方は、永い反独と苦悩の日
々の奥底から語っているのであり、相手に伝え
たいと思うイメージは、期待と情熱の火で永い
間煮つめられたものである。

これに反して、相手の方は、在り来たりの感
動や、何処にでも売っているような悲しみや、
十把ひとからげのうれしいなどを、心に描いて
いるのである。好意的であろうと反発的であろ
うと、その返事はいつものをはずれていて、結
局あきらめるよりしようがないのである。或は、
少なくとも沈黙が堪へ難く思われるような人々
の場合など、他人が真の心の言葉を見つけ出さ
ない以上は、彼等もはじめから観念して売りも
のの言葉を採用し、自分もまた、在り来たりの
形式で単純な叙述や雑報や、或る桌で毎日の新
聞記事のような言葉で話すのだ。この場合にも
なお、最も真実な悲しみが、会話の陳腐な語法
に翻訳されてしまうことを通例とするのである。

しかし、僕達は、そんなこと 承知の上で、
合席を開こうとしているのである。

僕自身、整理のないまま思うことを書いてみ
たが、討論、対話の不毛性の中の中に、恥じを
しのいで出す。

1. 政治斗争について考えること

- ① 僕達は、70年才一回神自合宿の総括パンフの
中で、60年代政治斗争を、個々の政策阻止ニ
から権力斗争への過渡期としてとりえこいた。
即ち、個別斗争を閉めく中で、帝国主義権

力を打倒する左翼の戦略を導き出すという段階
から、現実的に、帝国主義権力をいかにして打
倒し、奪取するのかということが、決定的に向
われていた時代であったのだ。

つまり、階級斗争の曲折期における飛躍・扯
揚が向われたのであり、その運動構造の転換が
問題となったのであった。

当然にも、今までの運動組織論<党—統一戦
線>に対して、軍事の問題がもちこまれ、<党
—軍—統一戦線>という組織論が提出されてい
る。

この裏をめぐって、新左翼諸党派は、様々な
流動をおこしている。

70年代初頭の混乱は、この問題を軸にして巻
きあこっているのである。

ある部分には、この問題を「内乱的死斗」的大衆運
動にすりかえたり、又、ある部分には、この問題
をとらえながらも、60年代末の街頭武装斗争の
域を脱する出口を見い出すことなく、又、ある
部分には、軍事に集中し、大衆運動のこの時代に
あける構造を見失っており、あとの部分には、ま
ったく市民主義運動へと落ちこんでいる。

そして新左翼総体としては、集会—カニパニ
ヤデモというサイクルの域を脱していかないの
である。しかし、政治集会とデモは、階級斗争の
いかなる時代にも必要である。米国の階級斗争
は、日本のそれより、権力の弾圧がきびしいた
め——デモ、集会にも州兵が銃をもって出動し
発砲するので、日本のようなケバ棒、火炎ビン
斗争のような流動的なことはやっておられず—
徹底した合法斗争、平和デモが、徹底した非合
法斗争、爆弾、テロ、銃撃戦かに分離されてい

る。そして非合法組織が、最近では、20教組に広がっており、一日平均2〜3回の爆破がある。一僕は、この時代には、先進国暴力革命という点から、「テロル」・「略奪」・「誘拐」という視点を提起する中から、個々の斗争の構造の転換をほか、ていくという方向性を見い出してはと考えるが、今回はやめておく。――

④ もう一つ、個々の斗争は、今まで(日本階級斗争史上)徹底して斗われていなかったという点を、考えてみる必要がある。つまり、60年代政治斗争は、個別斗争から、個別斗争へののりうつりという運動構造ではなかったのかという問題である。確かに、新左翼諸党派は、その「のりうつり」によって、帝国主義権力に肉迫し、左翼の戦略を定立するという運動であった。が、ここにも、70年代斗争陣型を考える必要があると考える。最近、地域斗争とか、地区共闘とか叫ばれているが、この問題を考えるにも、60年代個別斗争をとらえかえしてみなければならぬ。

個別斗争のく~~発生~~成長~~発展~~権力との攻防戦>という過程を、新左翼党派は、介入、利用し、権力との政治焦点のつまり、決戦という形でおし流し、個別斗争の総括、次ののりうつりという図式があった。ここで僕が考えることは、個別斗争の発展の過程で、必然的に、権力との暴力的攻防に入り、権力に封じ込められ後退、妥協という形でカベにぶちあた、ていくという今までの形態を、徹底した非合法的戦術の駆使によって、突き破っていくということである。そこに、新しい軍事の道が開けるのではないかと思う。《例……》

戦略的意志一致を千回するよりも、具体的非合法斗争を一回でも起こすことが、現在必要とされているのではないだろうか。ドンキホーテ的と一笑されるかもしれないが、風車を怪物と、思っ、て愛馬にまたがり、突進していく姿は、何と僕達の生き方と似ていることだろう。語りをおかしながら、もう一度立ち上がろうとする僕達と。そして、成長発展し、視野を広げ、物がよく見えるようになるのではないだろうか。

⑤ この間、世界性・民族性、国際主義、民族主義、プロレタリア国際主義という言葉が殊々に使われているが、一体これらは僕達にとって、何なのだろうか。

「プロレタリア国際主義」を、旗印しにしていた僕達は、もう一度、これを考えてみる必要があるだろう。現代世界においては、帝国主義諸国家を打倒するという下に、各国の反帝斗争を連帯して進めるという点で、これは言われているが、僕達は、更に、世界的な統一機関として、具体化していこうとしているのである。

例えば、日帝のアジア侵略を阻止するというのは、アジア人民との連帯であり、入管斗争は在日外国人との連帯した斗争であり、ベトナム反戦は、インドシナ人民との連帯であった。しかし、このような連帯は、「プロレタリア国際主義」の内実が、「反戦」という次元にとどまることをよきなくされるのである。

それを更に、先進国革命左派による、攻撃目標の一致、組織的交流―結合(具体的には、今まで教団行なわれて来た、~~世界~~世界反帝会議等)労働者国家(とくりわけ、世界戦略を有しているそれ)との、人的交流、交際の確保等によって、

世界各国の階級斗争に対する単一指導部、共同斗争を獲得していくことが、これからプロレタリア国際主義の内実とならなくてはならないだろう。

ここで整理しておかなくてはならないのは、僕達自身が、現代世界においては、民族国家という国家の中に、国境を境いとして分断されており、この国家や地域の人間の分断は、一つの政治、一つの支配であり、そこに存在し、他方僕達は、この世界に存在するということである。つまり、民族的存在としての民族性と、世界的存在としての世界性という二つを有しているのである。この二つの観念を、対立表向しやすが、この二面性を確認してみないと、支配、権力のキャンペーンする民族主義、排外主義に乗せられたり、またその裏がえしに、民族主義を悪物視したりするのだが、それらは、支配者による一面的な見方の中に落ちこんでしまうのである。

さて、「抑圧民族—非抑圧民族」という形に、帝國主義の再編侵略の局面を、とらえ返すむきがあるが、これはプロレタリア階級斗争を、民族解放という狭視の裏から、とらえるのと同じであり、ブルジョアジーの「民族主義」の裏返しであり、この「抑圧民族—非抑圧民族」というパターン化の中では、プロレタリア階級斗争を、ボカしていく術に陥る。例えば、アラブゲリラによるプロレタリア革命斗争を、アラブ民族とイスラエル民族の抗争という形で、ブルジョアキャンペーンされていく。

民族主義の再編侵略の局面を、とらえ返すむきがあるが、これはプロレタリア階級斗争を、民族解放という狭視の裏から、とらえるのと同じであり、ブルジョアジーの「民族主義」の裏返しであり、この「抑圧民族—非抑圧民族」というパターン化の中では、プロレタリア階級斗争を、ボカしていく術に陥る。

2. 神学部内にいる僕達について

僕達は、これから何をしようとしているのか。否、何かしようとしているのだろうか。懐古趣味に落ちたり、何を考えていいのか迷っていたり、思い出したようにデモに出てみたり、残ったものは。確かに、去年来の斗いは、これほどの分解をもたらす規模をもっていたのだが。そして、今は、誰もが、教授も僕達も、「学問・実学」について語るものではなく、お互いに、そこに立ち入らないようにしているものだ。その中で、一回性を中心として、運動に対するフレッシュな感覚をもって「入管等」を手がけている。

これを、神学部は、4年周期で斗争がおこっている(60年安保斗争、64-65年此春春、学館、日カン斗争、69-70年大争、安保斗争)から、この状態もまた、1~2年すれば……とか。何々斗争から〜斗争へという斗争ののりうつりでとかいうことでは、現在の問題に全く答えることはできない。

大学の「アウシビッツ体制」とか、「帝國主義的再編の進行」とか、市民社会の帝國主義的再編とかを身にしみて感じる今日この頃、政治的連帯を失った僕達は、まったく、これが「カウ係」かと酒で飲ますにはあられないような気持である。

とこれ、その悲觀主義的になっても、くそおもしろくないで、僕達の「何をすべきか」と月並みだが提議したいと思う。政治に対する組織的対応は全く出来ない段階では無理だが、大学に在りながら市民社会に於て強固な斗争組織を形成してゆくという長期路線の下に難題を挑む。

一つは神学部理念に対する僕達の側の再形成である。現在神学部内では不問にせざるこの理念問題は、理念なき理念とか、再建への過渡とかいわれているが、神学部を根底からくたえす方向と説得力を求めるとして、この原則による提議をすべきである。

共同理想と呼ぶとしておはす、批判者とか反批判者という価値観を越えしつゝの次元は遠征人間としての新しい価値観の提議である。一つは宗教批判以降の概念論、哲学と社会と状況の分析、フイルバウハ、初期マルクス以降の研究、一つは現代過渡期世界、江戸革命から現代に至る世界の研究である。これら三つを軸とした、自治会段階の研究会の設定を決議してはならないであろう。そしてそれを軸にした、入道、及軍、公営業人の組織的再編を展望してはどうか。

(付) 読んでみて何のシケるのか。ホ!! ヨーシニユーエイトカ いえはうな、アツク。

おわり

僕達は自らを権威であること疑いもた見つける。虚言と墮落が常に自分の分身であることを知っている。しかも僕達は転向の消滅にあることを知っている。主体の革新は革命という言葉を知ることではおはすは、そうであるが故に僕達は 消滅を先と続けることを自ら自身に約束するのだ。不毛な「対話」や「コミュニケーション」ではなく 70にも、先に対する熱情の気風と共に。

学問、思想、真理と湯のた言葉で済ませようではない、研究するに暴力を復権してあげよう、いや推定を不安や安心を排して。

「狂気の時代と生きろ」

広島・長崎で原爆が爆発してから既に25年が経った。10数万の人々を直接殺し、数10万の人々を長い苦しみの中で生活へ向かわせた。あの苦しき原爆は、心の底から憎み、その全滅を叫び続けている唯一の証人達(死者達と長い間病生活を続けている人々)の告白をよそに人々の忘却に助けられて、今やボクスターですべてを雲に帰せ得る程に成長してしまっ

た。核は人類を変えた。英米独の出現以来人間は既に、いわゆる近代合理主義の道を歩み続けてきた。核の出現は油に火をきく人々を、と云うより、決定的に全人類を押し見合により深い「狂気の時代」へと導入したのである。

「狂気の時代——狂気が文藝刀を持つ時代」

25年間という被爆者達の苦しみは驚くべき連続した明日に示す様に、核爆弾の威力は一掃使用される、と文字通り「全滅可能」といふ事実としてある。(後世の者にとつての証人として何年にも償い難いものがあるが) 今の核は、未来に再び現実として現れる事と想定し得る恐怖を前提として、我々人類は正に狂気の時代に相互威嚇を為し、政治的には不気味な均衡を、日常にはより一層の合理主義の傾向=現状肯定の傾向をもちあわしているのである。我々は、意識するしとせざるしに関らず

弱肉強食の本能の命題を、人間の世に於て政治的・日常的に用いるが、冷静な真理として導入し、その庇護の下に生活をしていけるのである。もし立場が逆ならば、正に日々のはげしさを無にされる。今の核は、その証人に人類が持ち、しかもその運命を現実上、二ダリンとパナゴシの教人に象徴される様に、フランス、イギリス、そして中国に於ても一握りの人々に委ねられてしまつて

正に「狂気の時代」を待つ(何である?)

私は、未帝が核を持ち、人類を全滅させようとの量で、全世界にその威力を押し、現在時に行使している時、今の核は、狂気の真現として、未帝に対して構わしやうとする人々が、相応の力を持つ事と決して右と見し、右の一人である。(私は本来、すべての武器の空くばかりを望む、少くとも現時、於ては、軽蔑的に理想主義者と断定されるを得ない人間であるが、しかし、その核は私にも、未帝の狂気度は上述の様に、正當である、と云う得る程だと思ふのである。) しかし、広島・長崎を知り日本人として、少くとも、広島・長崎の近くに住み、今の25年間をわづらわらう見る社会をより多く持った一人の人間として、私は、度重ねられる中国の核実験に對して、明確に異議を申し立てるものである。毎時、事が人間の主体に、関らぬと、死との運命の内題だからである。日中正統本領が、中国の核実験成功に當

って視覚に送った事を知った。私はずの行為
 に対して激しい怒りを持たざるを得なかった。
 彼等が 予の種の爆発の恐しさを知っていた
 はずだと思ふからである。 百歩を譲って
 予の爆発が 現在向けに 未帝の狂気を幾分
 も静め 未来向けに何らかの新しい世界への
 初まりであるとしても さくもし予が
 抑止力として(の働き(予の働き自身は既に最
 大限度のたが)を棄て 戦略的に用いられ
 具体向けに人の頭の上で爆発させられるとす
 れば 少くとも直下の人々には彼の思考や性格
 等々の個性は全く関係する事なく ただ死と
 のみ被り たゞ予の後に 来るべき新しい
 世界が来たとしても 予の時間と永遠の沈黙
 のまじり過ぎは分けがたいのである。

私は 核に閉ざる限り 米国も中国も無く
 飛走す。 予をナチセンストと 誰にも云
 わせはしな。 「No More Hiroshimas」とい
 う標語は 今日国際状況の上で 最も高く掲
 げらるべきものである。 大田原村平和塔の建
 りに低く淋しくたたきつていへばさびしい
 被爆者の一人であり 既に9年前に世を去っ
 た手塚良直氏の墓の今はずい言を 私は
 忘るべくない。 予は私の云う狂気の時代に終
 止符を打つ時に来る事を知っていたからであり
 又 人間が予を許し得る事とあくまでも信じ
 たいからである。

「狂気の出現の最近事例に対して我々は」

私は 狂気の時代の象徴として 核爆弾に
 ついて書いてきた。 予して現在 日本向けに

の狂気と対峙させられている人々について考
 えざるを得ない。 即ち 核基地と共に日本を
 踏んでいる沖縄の人々についてである。

しかし 私に沖縄について思ふは あく
 まで想像の域を出ず しかも 本土に在る
 人間としての一片の同情に終ってしまふかも知
 れない。 少くとも沖縄の人々からは予
 のまじり過ぎのまじり過ぎ一蹴されしてしまうかも知
 れないからである。 それでも予は私に書い
 てる通り 又 予は多くを知りたいと思っ
 てる。 予は 現在向けに我々の政府に
 即ち いろいろわけが本土に於て301試序と
 獲得した自民党政府が 過去100年間本土が
 沖縄に流して来たまじり過ぎの存在を
 継続的に 否 断り残酷的に 持統させよ
 としていふからには他はさげない。 予は取りも
 直さず 我々本土に在る人間の沖縄に開いた
 「史の犯罪性の破である。 しかも 我々の生
 きる現在に於て進行されている事であるから
 である。

「沖縄に於ける狂気の現実」

「ベトナムに爆発B52の常駐」「未兵による
 暴行・盗み取りの劣悪行為の続発」「言論・
 政治・集会・組合...等々の基本的人権
 の略奪」...等々 沖縄に於ては 正に狂気
 的の事例を掲げざるに事欠かぬ。 しかし
 私は 予ららの狂気の矛盾を互に開くもの
 としての「核による同時の恐怖」と「25年間
 何等為すべき事と」...等々 我々本土の人間
 の犯罪性によって(予ららと云ふは予の未帝

のいふとおりにも同じで書こうと思ふ。
 核実験はまさに世界分割に同じで私の感想
 — これは正に感性的なものだが — は
 既に書いたけれども、こゝで私対、所謂「核
 の傘」下に着いた（の、人間の大工と分れた二
 方向の事と思ふ）。それは常に「神繩」と
 日本本土に於て象徴される。

現在 我々 子供が 100 円玉を持って、
 東京 買いた行くのを見るとき「時代も変っ
 た分、身と来ばあま水顔に云い合ひ、或いは
 我々の自身、音楽の一本も聞きたらつーせー
 玉片玉に居る時、静かにならばりばり得
 う。云うに及ばず、この頃向は、60年からの
 へと丁度戦争、65年の朝鮮との交戦の連帯以
 来の繁栄、そして何にも増して、米軍との安
 保条約による米各基地作戦の犠牲に於ては
 我々申し、肉きすら汗さればいふのである。
 ここに明確に「虐待者」としての本土に住む
 人間と「被虐待者」としての神繩に住む人々と
 の深い亀裂が主としていふのである。虐待ら
 れている人々には当然の事として、虐待者
 に対してのとす思ひ憎念がある。そして我
 ら虐待者は、その被害の憎しみを受けねば
 ならぬ。加えて、我々自身の手に於て
 為すべき事を為していかねばならぬ。
 う。そう云いつつ私は、私にどれ程の
 事とすれば彼等と連帯し得るのか、大江健三
 郎氏の言葉とかりれば「このより日本人で
 はないと、この日本人へと自分とがさる事は

できないか、と内中どうも得ない。それは神
 繩の人々が受けた虐待が余りにも想像を絶す
 るものであり、しかも、その虐待の行為者
 として、本工の人間であったからである。

明治期に於ける神國との領土問題で神繩の
 引き廻し以来、前述の現代に於ける人身御
 供としての存在にまで、神繩は常に「根
 利用物」であった。「あゝ、ガマラ水水はいよ
 う最終的決断を」と太平洋戦争の終末段階
 に於ても防疫戒で「かか」った。
 「慶良間(ケラマ)列島に於ておこした
 七百人を数える危殆者集団自決は《生き
 延びようとする本土からの日本人の軍隊の即
 断は、これから米軍と組むうち長期戦に入る。
 したがって住民は、軍隊の行動をさまたげば
 いために、また食糧を部隊に提供するため
 いさぎよく自決せよ》という命令に発するこ
 とをいふ。神繩の民衆の死を抵当にあが
 らぬのは本土の日本人の生と、この命題は、こ
 の血がまぐさい庵間味村・渡嘉敷村(トカキム)
 の酷たらしい現場に於ては、より形をとり
 ながら核戦略体制のもとに、そのま
 つらばり生きつづけていふのである。」

大江健三郎「神繩16」刊

私はこの文章に代表される、大江氏の「神
 繩に於ける一連のトク」彼虐待の事、と
 もらしいアキラヲコソの一本として片付け事
 はない。(現に《 》の中の文章は「神繩
 戦史」(上地一史著)によっている。)

私はこの文章の真偽を論ずるよりも、25年
 前にこの種の事件が本土の右に於て強制さ

水ていの中、そして沖繩を多くの人々が正
に犠牲として死んでいった。後、即ち戦後25年
間、本土は沖繩に対して何の報いもせず
地理的意義、とか云って、サンフランシスコ
条約によつてこの島を米帝に委ね(その時が
結果自身、旧日帝と本土との野望の敗北の尻
ぬぐい方のため)。安條によつて(核配備に
至るまで設置し、しかも核配備を認め、事
をさしげい、という事)告発したい。
沖繩は次の様で、恐ろしい。しかし、想定
し得る事実に於て、今もなお本土に多くの
防波堤である。即ち-----

我々はよく、日本の核を持つが持たぬかた
ついで語り合ふ。私は持たぬと思つた。
何故ならばそれは、日本の数発の核爆弾によつ
て正に全滅するやうな島国であり、たとへば
中国やソ連に向けてミサイルを用意して来た
ところを、抑止力としての効果さえ発揮しな
いであらう事が容易に判断されるからであ
る。しかも、本土よりまず本土は沖繩に核
があり、しかも、核付き遠景が策謀されてい
るとすれば(政府の言明の嘘は、現在沖繩に
核が突在する事不端に示している。)それは
最早、補償すればより頼りにする防波堤の類
でもなく、明確に、正にそれとしか云い得る
兵隊の人身御供の島の事なのである。加之、
書けば、もし、中国・ソ連から沖繩へ向けて
核が発射されたら核発してしまふ。(その後は
正に核が沖繩に存在するからには他はらばり)
それが沖繩に到達すれば、そのまゝ全滅である。
恐らくそれ以前に沖繩からは、報復用のミ

サイルが出る中だ。(勿論、その通り又
云ふまでもないが、即ち、米帝の意、と、
) 土に重要なのは、それと一連のあり
得る事態に際して、合はらニクタンとペンタ
ゴンの数人、遠慮後とやらにして、せいせ
い、本土の政府もが加わらざらうか、
それにして、沖繩の人々は、自らの生命を決
定する機会すら与へられてはいないのだから

これは文字通り想定である。(沖繩に
於ては、漫画として皮肉に新聞の凡庸に戦
せ得る程に合気な事柄ではない。この種の恐
怖は、今も、四六時中同様にしている。(あ
つきの墜落は我々の記憶に新しい。あの時
の沖繩の人々の心算は-----)

やはり、本土の人間は、何事かを為さねば
ならぬのであつた。何事かを-----

私はここに、本土の人間が招いたものであ
れば、核の恐怖も、その所有者たる米帝に依
つていふものであつた。そして、本土の人間
が頼んだものであれば、現実には、米帝の
世界戦略=核支配(それは、ニクソン・ドクト
リンの示す如く、より遠くまでその意向が
か---)の中にあり、沖繩は、あつた事と
論、腹面も、米帝に追従し、絶つて今また、不
安は、米帝と逆手に取つて、アジヤの盟主た
らんとし、旧日帝に対して、我々は、我々の
身の任務として、責任として、闘つていかな
らば、いふ。加之、あの「狂気の島の」であ
る米帝に対して、闘つていかならば、いふと思

うの(あふ)

11月15日 沖縄で国政参加への第一歩として
 の総選挙が行われた。本土に住む我々は
 明確に あの選挙による結果がたゞ之どの様
 な結果に終る)とも 本土に於ける腐り切っ
 た政党の列に組み入れられ 衆議院には野
 田内閣を夕方にして(の自民党政府の危険守り向
 の下に 沖縄の人々の心情は全く距離した
 方向へ引かれていく事にはさう事と想像(得
 た。 投票率は83%に上った。私は投
 票を拒否した17%の人々の多くが若い人々で
 あった(欲しい。ともかく 沖縄からの報道に
 依れば 投票直前の4~5日に於いて(沖縄
 の人々は ますますと演説会場へ向い出
 官伝カー上の候補者の声に耳を傾けよう)に
 付った(。 私は 沖縄の戦後25年を想
 う時 沖縄の人々が「一票」といふ語感に遠
 い話められた形(投票に走った事と想像し
 本土に於いて語る様な形(批判する事は出来
 ない事と想)。この考えを私は 沖縄の時
 殊性(放っておけば 黙殺されて 選挙はす
 のまま行われた(あふ)よう)に於て 上原
 氏の立候補に対してあてつけようを得ない。確
 かにセレスト回避以来 上原氏は 所謂静か
 斗争へ傾きつつある。しかし 昨年度の全軍
 労の斗争を想起し あの困難の中で斗った後
 上原氏が想い出す時 私は何等全軍労と連帯
 する事もせず いや何にも留して 現時兵での
 国政参加選挙を阻止し得た(か)下院(左翼)に
 して 言論を行使すべきだと思つたのである。
 かの観望に依れば 上原氏に抱かされた